



コープ自然派の有害化学物質から子どもたちを守る取り組み

生活協同組合連合会コープ自然派事業連合 副理事長 辰巳千嘉子

コープ自然派は「誰もが有機農産物を食べることができる社会」をめざして国産オーガニックを推進しています。安心・安全な食べものにとどまらず、微生物から始まる命の連鎖をつなぐ暮らし、社会のあり方をめざして、生産者とともに一歩ずつすすめている取り組みについてご報告します。

●ネオニコチノイド系農薬排除への挑戦

コープ自然派のネオニコチノイド系農薬（以下、ネオニコ）排除の取り組みは、2010年、ダイオキシン・環境ホルモン対策国民会議（JEPA）の中下さんにその危険性を学ぶことから始まりました。当時、環境保全型農業の多くがネオニコに頼るなかで排除しても生産者が収穫できるのかと悩み、議論を続けましたが、その神経毒性は明らかでした。「子どもたちを守ることを最優先に考えよう」と、2010年5月、生産者クラブ学習会でネオニコについて学び、排除しやすい作物から段階的に、2014年度からネオニコを問題農薬に指定することが決まりました。

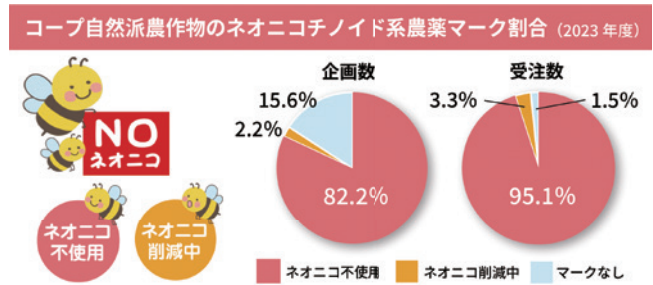
ネオニコ不使用の方針を決断できた背景には、有機農家を育てる「有機の学校」を設立し、生産者・組合員・職員がBLOF理論（Biological Farming/生態系調和型農業理論）を中心とした有機栽培の理論と技術を学んでいたことがありました。作物を強く育てることで、新規就農者も有機で栽培できていたことが、ネオニコ排除への確信となりました。

●生産者との議論からネオニコフリーマーク誕生

米は問題農薬に指定した初年度からほぼネオニコフリーになり、野菜類も順調に推移しましたが、果物は特にネオニコ排除が難しい作物です。組合員が産地を訪問して一緒に学び、話しあい、栽培技術講習会を開催して、ネオニコフリーの産地が少しずつ広がっていきました。

とはいえ、気候変動の影響で病害虫対策は難しくなる一方です。2015年度の「生産者消費者討論会」では、生産者からネオニコ排除栽培の厳しさを訴える声や、「苦労してネオニコを使わずに作っても買ってもらえるのか」という声が上がリ、組合員は「ネオニコを使わないものを選びたい」と訴えました。そこで、商品カタログに「ネオニコフリーマーク」を表示することになったのです。

この取り組みを開始した2017年度、94.8%もの組合員がネオニコフリーマークのついた農作物（ネオニコ不使用79.8%、ネオニコ削減中15.9%）を選びました。選ぶ



ことで生産者を応援し、さらにネオニコフリーの生産者が増えるソーシャルグッドな循環が生まれています。

●リサイクル委員会を中心に脱プラへ

農薬や食品添加物、畜産の抗生剤など食品に関するもの以外にも、暮らしのなかには有害な化学物質があふれています。日用品や化粧品も、メインカタログの基準に、内分泌かく乱物質（環境ホルモン）を排除することや、包装が簡易で人体や環境に悪影響を及ぼさないことを掲げ、ペットボトルも原則禁止していますが、食品を配送する上でプラスチックの使用は避けられないのが現状です。

2020年、できるだけ環境負荷を減らそうと、組合員が中心となってリサイクル委員会が立ち上がりました。商品カタログや梱包袋（ポリ袋）などの回収率アップのほか、卵パックの紙素材への切り替えや、商品包材のプラスチック使用量を減らすなどの取り組みを、生産者とともに学習を重ねながらすすめています。生活者目線ならではの活動が事業方針を動かします。

●学び、みんなで行動を！

香害に苦しむ組合員も増えています。商品内容だけでは組合員の健康被害を防ぐことができません。組合員宅に商品を届ける職員も定期的に学習し、香害の加害者にならないよう取り組んでいます。

PFASやマイクロプラ汚染も広がり、不安を感じている組合員がたくさんいます。また、都市下水汚泥肥料も懸案となっています。学ぶことが生協活動の根っこで、JEPAとの連携で得られる最先端の情報が私たちの指針となっています。「子どもたちのために！」を合言葉に、生産者や他生協・団体と連携して、学び、行動する市民を増やしていきたいと思っています。そして、これから始まる国際プラスチック条約に向けた署名活動に力を入れて取り組みたいと思っています。